

糸井馬場第2号古墳
糸井塚ノ本第2号古墳

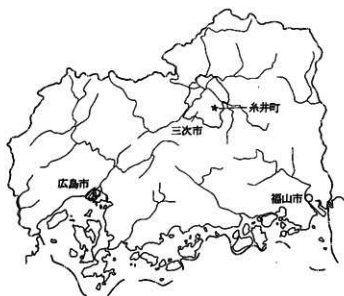
1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

糸井高塚第2号古墳 糸井塚ノ本第2号古墳

頁・行	誤	正
図版目次 図版3a	第1・2号古墳全景	第1号・第2号古墳全景
4・1	8世紀代までに	7世紀代までに
6・13	土葬墓(並)	土葬墓(並)
6・27	ものかとうかは不明である。	ものかとうかは不明である。
8・第4図	図の説明に追加	(アミ目は粘石)
図版3・4		入れ替える
目録版 3-b	周溝上層断面	周溝土層断面

糸井馬場第2号古墳
糸井塚ノ本第2号古墳



1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、昭和62年度に発掘調査を実施した県営ほ場整備事業糸井地区に係る糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳の発掘調査報告書である。なお、糸井馬場第2号古墳は当初、中・近世古墓と考えられたが、古墳と判明したため、名称を変更した。
2. 発掘調査は、広島県三次農林事務所から委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は、川尻真・西村直城が行い、遺物の実測・写真撮影・製図は川尻が行った。また、本書は、川尻が執筆・編集した。
4. 図版と挿図の遺物番号は同一である。
5. 本書に用いた方位はすべて磁北である。
6. 第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（三次）を使用した。

目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(6)
IV 糸井馬場第2号古墳	(8)
V 糸井塚ノ本第2号古墳	(12)
VI ま と め	(15)

図版目次

- 図版 1 a 糸井馬場第2号古墳遠景(西から)
b 同上近景(東から)
- 図版 2 a 糸井馬場第2号古墳全景(北から)
b 同上(西から)
- 図版 3 a 糸井馬場第1・2号古墳全景(南西から)
b 糸井馬場第2号古墳造出部(南から)
c 同上くびれ部(北から)
- 図版 4 a 糸井馬場第2号古墳陸橋部(東から)
b 同上周溝土層断面(西から)
c 同上遺物出土状況(北から)
- 図版 5 a 糸井馬場第2号古墳調査風景(北から)
b 同上出土遺物
- 図版 6 a 糸井塚ノ本第2号古墳近景(東から)
b 同上調査風景(東から)
- 図版 7 a 糸井塚ノ本第2号古墳調査前全景(西から)
b 同上調査後全景(西から)
- 図版 8 糸井塚ノ本第2号古墳調査区出土遺物

挿図目次

- 第1図 周辺主要遺跡分布図(1:50,000) (3)
- 第2図 周辺古墳分布図(1:5,000) (4)
- 第3図 周辺地形図(1:2,000) (7)
- 第4図 糸井馬場第1・2号古墳地形測量図(1:400) (8)
- 第5図 糸井馬場第2号古墳墳丘測量図(1:100) (折込)
- 第6図 糸井馬場第2号古墳墳丘断面図(1:100) (9)
- 第7図 糸井馬場第2号古墳造出部実測図(1:60) (10)
- 第8図 糸井馬場第2号古墳出土遺物実測図(1:3, 1:4) (11)
- 第9図 糸井塚ノ本第2号古墳地形測量図(1:250) (12)
- 第10図 糸井塚ノ本第2号古墳墳丘断面図(1:100) (13)
- 第11図 糸井塚ノ本第2号古墳出土遺物実測図(1:4) (14)

I はじめに

県営ほ場整備事業糸井地区は、同地域内の耕地の整備及び道路、用排水路の完備を目指して、昭和57（1982）年度から開始されている。同事業の開始に先立ち、広島県三次農林事務所（以下「三次農林」という。）は、昭和55（1980）年10月、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）へ、事業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについての照会を行った。県教委では直ちに分布調査を実施し、13か所の遺跡を確認した。このうち糸井古墓群（6基）については、昭和58（1983）年に、2号古墓を広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」という。）が、3～6号古墓を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という。）が事前調査を実施し、記録に残した。

昭和61（1986）年7月、三次農林では、工事計画に現状保存できない糸井馬場1・2号古墓、糸井塚ノ本第2号古墳の3遺跡について再び県教委に調査を依頼した。同年10月、県教委は、財団センターとの協議の結果、文化庁と農林省との覚え書き「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」Ⅰの(5)にもとづき経費及び調査を事業者負担分（80%）と農家負担分（20%）に分けて行うことになった。このうち事業者負担分の発掘調査を財団センターが、農家負担分の発掘調査を県立センターが行うことになり、財団センターが糸井馬場2号古墓・糸井塚ノ本第2号古墳、県立センターが糸井馬場1号古墓を担当することになった。同年12月、三次農林は財団センターに糸井馬場2号古墓・糸井塚ノ本第2号古墳の調査を依頼した。財団センターでは調査を昭和62（1987）年10月5日から11月7日までの約1か月間実施した。

なお、調査の結果、糸井馬場1・2号古墓は古墳であることが判明したため、古墓を古墳に名称変更した。また、11月14日には、三次市教育委員会、県立センターとの共催で遺跡見学会を開催した。

本書は、以上の経過をふまえて行った発掘調査の成果をまとめたものであり、この地域の歴史研究に少しでも寄与できれば幸いである。

調査にあたっては、県教委の指導を得るとともに、三次農林、広島県立歴史民俗資料館、三次市教育委員会及び地元住民の方々から多大な御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

(1) 遺跡の立地

三次市は、広島県の北部、中国山地南麓に形成された三次盆地に位置する。糸井町は三次市南東部に位置し、町の東側を北流する美波羅川が形成する狭い沖積地と河岸段丘及び小丘陵からなる。現在、町の大部分を占める沖積平野と河岸段丘は、そのほとんどが水田として利用され、主に丘陵裾部や小丘陵上に集落が点在する。今回調査を実施した糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳は、いずれも丘陵裾部に近い水田中に立地しており、墳丘の周囲は削平が進んでいることから、遺存状況が悪いことが予想された。

美波羅川は糸井町の北方約3kmで馬洗川に合流する。この三次市街地南方から糸井町にかけての馬洗川及び美波羅川流域一帯は、小丘陵上に多数の古墳群が存在し、県内有数の遺跡密集地であるとともにその古墳数から、県内最大の古墳密集地帯となっている。糸井町はここの中であって周濠を含めた規模では県内最大の糸井塚ノ本第1号古墳（糸井大塚）が存在しており、今回調査を実施した糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳も含めて中核的な古墳群の一つを形成していたとも考えられる。

(2) 周辺の遺跡

三次市では前述のように南東部には多数の古墳が存在するが、このほかにも数多くの遺跡がある。以下時代順に古墳時代までを概観してみたい。

まず旧石器時代の遺跡としては、下本谷遺跡・下山遺跡などが調査例としてあげられる。いずれも石核・剥片などが出土し、下本谷遺跡では遺物包含層を2枚検出した。他の遺跡からも遺物が出土しており、今後の調査によってさらに遺跡数も増加することが予想される。

県内における縄文時代の遺跡調査例は他の時代に比べて少なく、三次地域でもあまり知られていない。その中で松ヶ迫B地点遺跡では早期の住居跡と押型文土器が検出され、貴重な資料を提供した。他に下本谷遺跡・宗裕池遺跡などでも早期の土器片が出土している。

弥生時代になると遺跡数は前代に比べて増加する。前期では、住居跡1軒が検出された高跡遺跡が知られるが、調査例は少ない。中期では、塩町式土器の標式遺跡である塩町遺跡で10軒以上の住居跡が発見されている。また、塩町式土器が出土した殿山38号墓は、貼石、石列を施す長方形墳墓で、四隅突出型墳墓の初源の形態とみられている。後期になると同様の墳墓として史跡矢谷古墳・同花園墳墓群など数例が知られる。

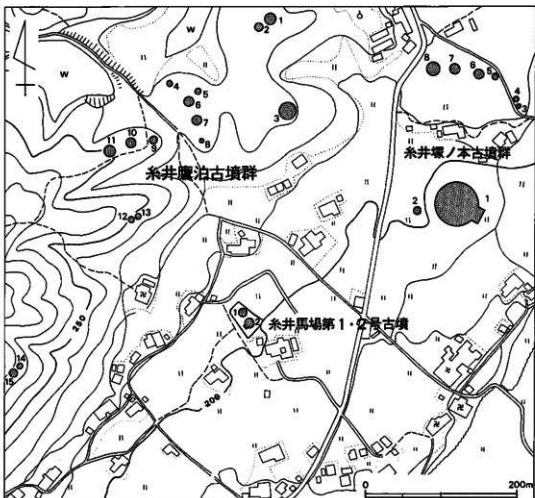
古墳時代になると古墳を中心に多数の遺跡が存在し、分布的にも広がりがみられる。今



第1圖 周辺主要遺跡分布図 (1 : 50,000)

- | | | | | |
|---------------|----------------|------------|-------------|--------------|
| A. 糸井尾遺跡古墳群 | B. 糸井塚/本郷2号古墳 | 1. 花園遺跡 | 2. 日光寺遺跡 | 3. 榎屋高塚古墳 |
| 4. 下本谷遺跡 | 5. 宗形池西遺跡 | 6. 高橋遺跡 | 7. 松+迫遺跡群 | 8. 高杉古墳群 |
| 9. 仲藏寺・七ツ塚古墳群 | 10. 勇免遺跡・勇免古墳群 | 11. 三万寺古墳群 | 12. 堤町遺跡 | 13. 鹿岡山遺跡 |
| 14. 仏谷古墳群 | 15. 萱草古墳群 | 16. 才の神古墳群 | 17. 界塚古墳群 | 18. 大瀬堀池古墳 |
| 19. 彫古墳群 | 20. 五反田古墳群 | 21. 大平遺跡 | 22. 一本木古墳群 | 23. 糸井塚/本古墳群 |
| 24. 糸井尾泊古墳群 | 25. 上堂古墳群 | 26. 前貞東古墳群 | 27. 下井田西古墳群 | 28. 駒山古墳群 |
| 29. 畑原岡山古墳群 | 30. 畑原古墳群 | | | |

のところ4世紀代の古墳は知られておらず、5世紀以降8世紀代までに、三次盆地だけで総数約3,000基を数える。調査された主な古墳のうち、前半期のものでは、帆立貝形古墳で面文帯神獸鏡を出土した酒屋高塚古墳、約140基が集中する四拾貫古墳群のうち比較的大型の円墳である四拾貫太郎九第2号古墳・四拾貫小原第1号古墳、琴柱形石製品・内行花文鏡が出土した畑原開山第9号古墳、前方後円墳で内行花文鏡が出土した善法寺第9号古墳などが知られる。後半期の古墳では、主な調査例としてまず、6世紀初頭に位置づけられる緑岩古墳がある。径約15mの円墳で、内部主体が小型竪穴式石室、周溝内から円筒埴輪・馬形埴輪・須恵器などが出土した。また、大坂古墳群のうち3基の古墳が調査され、そのうち第6号古墳の第2主体部からは6世紀中葉と考えられる須恵器が出土している。



第2図 周辺古墳分布図 (1 : 5,000)

このほかにも、後半期の古墳は、前半期の古墳に追隨するように同一の古墳群を形成するものが数例知られている。

古墳時代の集落跡は、古墳数に比べ、少数の遺跡が知られているに過ぎない。調査例としては、前半期のもので高蜂遺跡が、後半期では、日光寺遺跡・重岡山遺跡・松ヶ迫遺跡・大判遺跡などが知られるが、特に松ヶ迫遺跡群では、A・B・F・G地点合わせて、堅穴住居跡94、掘立柱建物跡12などが検出され、6世紀代の集落の様相が明らかになった。

・(3) 糸井塚ノ本第1号古墳(糸井大塚)周辺の古墳分布

糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳周辺の丘陵上には、糸井塚ノ本古墳群(8基)、糸井鷹泊古墳群(16基)が存在している。糸井塚ノ本第2号古墳はその古墳群中の1基で糸井馬場第2号古墳は、北西側に存在する第1号古墳と共に、2基で存在する古墳群である。このうち、糸井鷹泊古墳群の第14～16号古墳は、第1～13号古墳とはやや離れた位置で、標高もやや高いことから、別系列の支群か、あるいは時期差を示すと推定される。第1～13号古墳は、立地がいずれも丘陵尾根線上で、第4～8号、第9～11号古墳などは小支群を形成する。また第3号古墳はやや離れて位置し、規模も径約20mと古墳群中で最大であり、中核的な存在と考えられる。糸井鷹泊古墳群に対し、糸井塚ノ本古墳群の第3～8号古墳はやや低位にあり、立地も尾根線に沿うという形でなく、丘陵緩斜面の東-西方向に密集している。また、糸井塚ノ本第1・2号古墳や糸井馬場第1・2号古墳はさらに低位で現在の水田地帯に位置する。中でも糸井塚ノ本第1号古墳は、前述のように当地方でも最大級の古墳であり、南および南西方向に広がる低湿地帯を控えた立地である。糸井鷹泊・糸井塚ノ本両古墳群はこの糸井塚ノ本第1号古墳を中心に形成されたと考えられ、その中でも糸井塚ノ本第2号古墳はほとんど糸井塚ノ本第1号古墳と接して存在しており、陪塚的な性格が強い。また、糸井馬場第1・2号古墳についても糸井塚ノ本第1号古墳を望める位置にあり、さらに糸井馬場第2号古墳は糸井塚ノ本第1号古墳と同形態の帆立貝形であることなどから、これら2基の古墳は糸井塚ノ本第1号古墳をめぐる一支群として存在した可能性が強いといえよう。

Ⅲ 調査の概要

糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳が所在する三次市糸井町は、美波羅川西岸に広がる標高190～200m前後の沖積平野に位置する。調査を実施した両古墳は、この沖積平野の大半を占める水田中に、その墳丘の一部が残存していた。周辺には、昭和58年に調査を実施した糸井古墓群や県史跡の糸井塚ノ本第1号古墳などが存在するが、盛土が遺存する部分以外では水田化による削平が顕著で、今回調査を実施した両古墳とも同様の状況であることが予想された。

糸井馬場第2号古墳

本古墳は、この現状が糸井古墓群と同様であることから、当初、中・近世の古墓を想定して調査を開始したが、その後周溝の検出や出土遺物から古墳と判明した。古墳は、帆立貝形古墳で、規模は墳丘全長15.0m、造出部幅約6.2m、同長さ約2.5mである。南西部は検出できなかったが、幅約3.5mの盾形の周溝が廻る。周溝は、北東部で途切れ、幅約1.9mの陸橋部が存在する。また造出部斜面には貼石がみられる。遺物は周溝北西部から、須恵器(甕)、土師器(壺)などが出土した。

なお、本古墳の北西側には、同様な状況で第1号古墳があり、県立センターが調査した結果、径約11mの円墳を検出した。

糸井塚ノ本第2号古墳

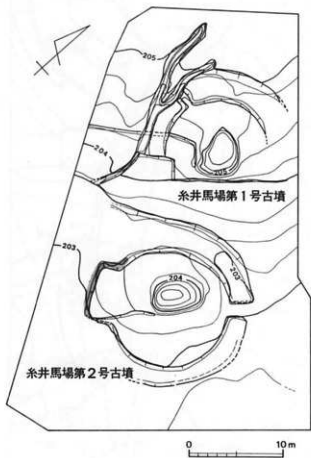
本古墳は糸井塚ノ本第1号古墳の西側に近接し、糸井馬場第1・2号古墳の北東約260mに位置する。古墳の周囲は、水田化が進む以前には、古墳北西部の丘陵面がさらに南側にくだらかに下っていたとみられるが、現在、古墳の周囲は約2m余り削平されて水田となっている。古墳は、水田化がかなり進んだ昭和27年頃の踏査記録によれば、径約10m、高さ約1.6mの円墳であつたらしい。

調査の結果、墳丘及び墳丘周囲は、削平を受けほとんどが消失しており、盛土や周溝は検出しなかった。わずかに遺存する南東側で墳端とみられる部分を検出したが、古墳の規模は不明である。また調査区南側で、約5.4m×約4.2m、深さ約0.5mの落込みを検出したが、近世以降とみられる陶器が出土したことから、その時期以降の土取りまたは耕作による痕跡と考えられる。遺物は他に、表土中から円筒埴輪や須恵器の破片が出土したが本古墳に伴ったものかとうかは不明である。

IV 糸井馬場第2号古墳

位置と現状

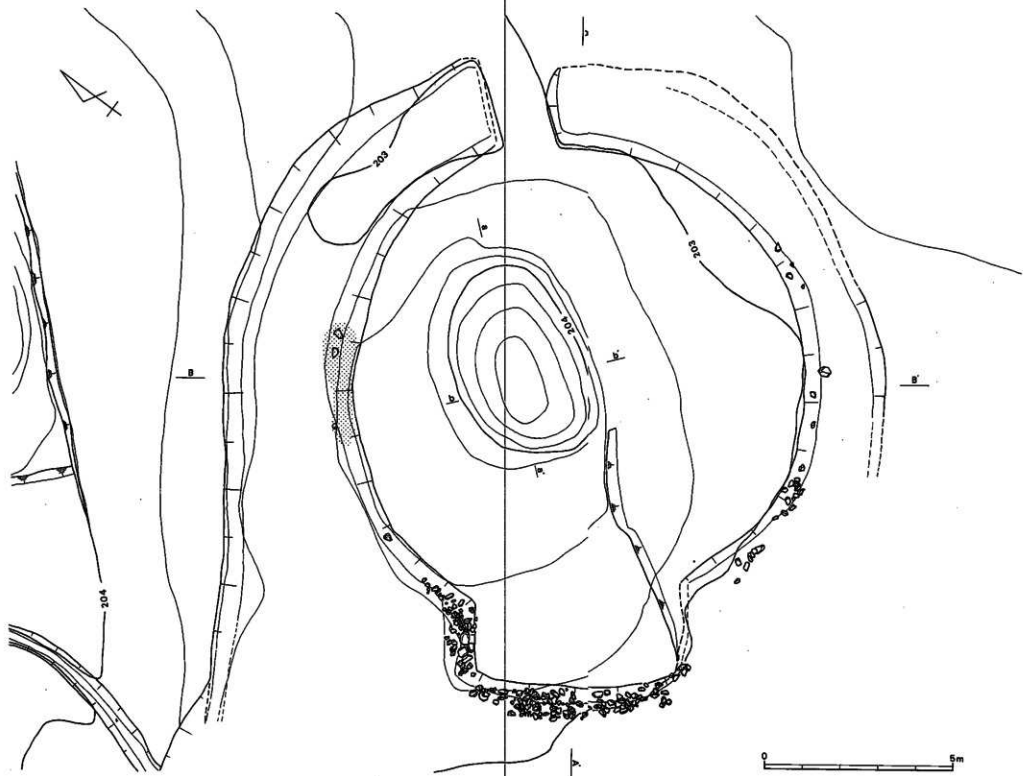
本古墳は、三次市糸井町696・697番地ほかに所在する。調査前の状況は、水田の畦中に、約5.3m×4.0m、水田面からの高さ約0.9mの盛土が遺存していた。当初は、この盛土を中・近世の古墓と考え調査を開始したが、調査が進むにつれ、この盛土周囲に周溝を検出し、さらにこの埋土から須恵器・土師器片が出土した。この結果、古墳と考えられることから、さらに周囲を拡張して水田耕作土を掘り下げ、平面形を検出し、南西側に造出部を有する帆立貝形古墳であることを確認した。調査は、墳丘残存部と周溝に、それぞれ土層観察用の畦を残して掘り下げた。



第4図 糸井馬場第1・2号古墳地形測量図(1:400)

墳丘

墳丘のほとんどは水田耕作による削平を受けており、平面形は地山(黄褐色土)面で検出した。規模はいずれも墳端で全長約15.0m、後円部径約13.2m、造出部長約2.5m、同幅約6.2mである。盛土は、墳丘中央よりやや北側に、南北約4.2m×東西約3.1m、周囲の削平面からの高さ約1.2m(北西墳端部から約1.8mの高さ)が残存しており、この部分の土層観察では、約20~30cmの厚さで、地山土に近い黄褐色土を4層にわたり、盛っている。盛土中には、旧表土面は存在しないことから、旧表土面から地山面に至る深さまでの土を削り取り、この整地後盛土を重ねたと考えられる。また墳丘盛土中には、内部主体が存在した痕跡は認められず、既に消失していた。



第5圖 糸井馬場第2号古墳墳丘測量圖（1：100 7ミ目は土器出土範囲）

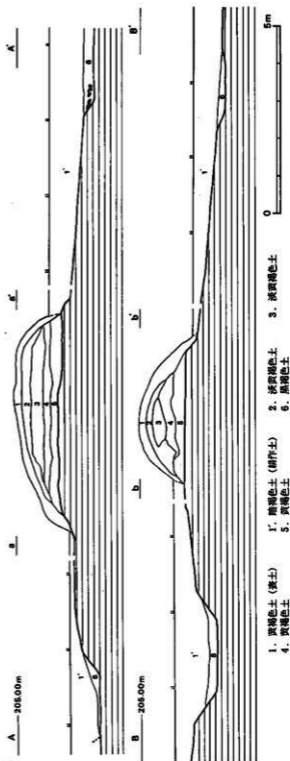
造出部は、後円部南西側で検出した。造出部南東側辺のくびれ部から南東側の角にかけては、近年の水田の排水施設等によって削平を受けている。造出部の形態は、北西及び南東の各短辺が墳丘主軸線と平行に延び、造出部前端(南西側の長辺)での広がりはない。また、造出部の墳端から高さ約30cmほどの墳丘斜面部には、約10~20cm程度の石を中心に貼石を施すが、北西側辺の中央から北西側の角にかけては、長辺約30cm程度の比較的大ぶりの石を用いている。貼石部の断面観察によると、これらの石は、灰色粘質土を厚さ5~10cm斜面に敷き、その上に貼付していたとみられる。

周溝

周溝は、南西側が水田耕作による削平を受け、ほとんど消失しているが、北西側では、幅約3.5m、深さ約0.3mを検出し、その平面形は、墳丘に相似した形態で廻らず、南西方向に直線的に伸びる。しかし、造出部の南西側には周溝の立ち上がりは検出できず、周溝の南西端は、さらに調査区外へ延びると考えられることから、平面形が盾形を呈する周溝と推定される。

陸橋部

周溝の北東側中央で、幅約1.9mの陸橋部を検出した。陸橋部の北側は、近年の排水施設により破壊を受けてい



第6図 糸井馬場第2号古墳墳丘断面図(1:100)

るが、周溝埋土の状況からみて原形はほぼ推定できる。なお陸橋部は、埋土により構築したものでなく、地山を削り残したものである。

遺物（第8図）

遺物は、いずれも周溝埋土から出土し、4が周溝南東部から、他はいずれも周溝北西部からの出土である。このうち、1～3は土師器、4・5は須恵器である。以下番号順に説明を加える。

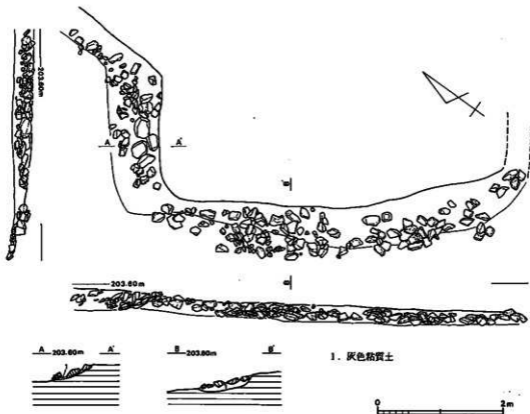
土師器・壺（1・2）

1は、口径15.3cmで、口縁部はやや外傾し、端部は丸く、やや肥厚する。色調は内・外面とも淡黄褐色、胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。

2は、小型の壺で、口径9.8cm、口縁部はやや外傾し、端部は丸く、擬口縁部ではやや肥厚している。色調は内・外面とも淡黄褐色、胎土には細かな砂粒を含む。焼成良好。

土師器・高杯（3）

脚裾部である。脚端部径12.8cm、端部は角張り、内面端部付近に強い横ナデを施す。



第7図 糸井馬場第2号古墳出土部実測図（1：60）

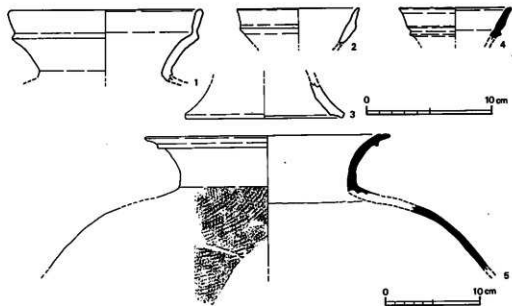
色調は、外面が淡黄褐色、内面が淡灰色で、胎土には細かな砂粒を含む。焼成良好。

須恵器・碗（4）

口縁部のみ破片である。口径9.0cmで、口縁部屈曲部外面には、断面三角形のシャープな稜をめぐらす。この稜から口縁端部にかけてやや外反気味に開いて立ち上がり、端部付近でさらに外反する。端部は尖り気味である。色調は外面黒灰色、内面は灰色である。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含む。焼成良好。

須恵器・甕（5）

口径26.0cm。口頸部は強く外反し、端部は丸味をもつ。外面口縁部に一条の稜線を、内面口縁部には、強い横ナデにより沈線気味に窪んだ一条の稜線がめぐる。調整は、内・外面口縁部を横ナデ、胴部外面を格子目状タタキ、内面には丁寧なナデを施す。色調は内・外面とも灰色である。胎土は2～3mm大の小石を少量含む。焼成良好。



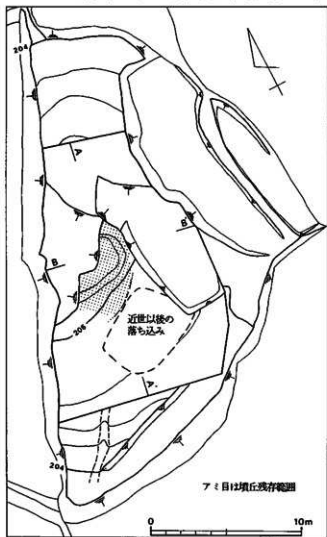
第8図 糸井馬場第2号古墳出土遺物実測図（1：3，1：4）

V 糸井塚ノ本第2号古墳

位置と現状

本古墳は、三次市糸井町775-1・775-2番地に所在する。西側には近接して、糸井塚ノ本第1号古墳が所在するが、現在残る畦畔からおよその周濠外線が想定でき、これによると第1号古墳の周濠は、ほとんど第2号古墳の墳裾と接している。

本古墳の周辺は、水田化による削平が著しく、本古墳の周辺、南北約30m、東西約15mを残し、約2mほど低く掘り下げられている。本古墳周辺の旧地形は、現在北側から北西側に広がる丘陵が、さらに南側に向い、なだらかに下っていたと推定されるが、本古墳の



第9図 糸井塚ノ本第2号古墳地形測量図 (1:250)

周囲は現在削平されて水田となっている。

調査前の本古墳及び周辺の現状は荒地で、墳丘は削り取られてそのほとんどを失っており、わずかに南東側の一部が残っているものと考えられた。

墳丘

調査は、墳丘残存部とみられる部分を中心に調査区を設定し、南-北、東-西に土層観察用の畦を残して掘り下げた。調査の結果、南東部に墳裾とみられる地山黄褐色土の掘削面を検出したが、他に古墳に伴う周溝や盛土等は検出しなかった。検出した墳裾部も墳丘南東部の一部にすぎず、墳丘の規模は不明である。

古墳は、昭和27年頃の記録によると、径約10m、高さ1.6mとあり、地元の方の話では、ほ

ば今回の調査地点であり、検出した墳端部から北西方向にその中心があったと考えられる。
その他の遺構

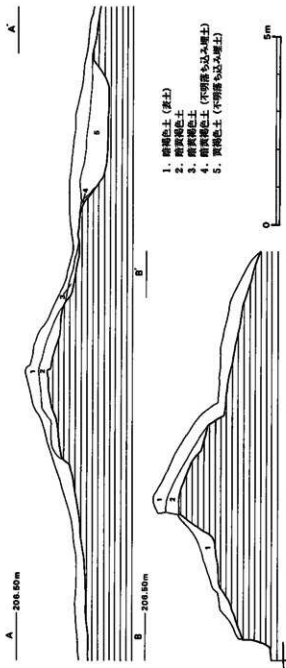
調査区南側で、約5.4m×4.2m、深さ約0.5mの落込みを検出した。埋土及び墳底面で陶磁器類が出土しており、その時期から、近世以降の落込みと考えられる。地元の方の話では、この調査区一帯も畑地として利用された時期があり、土取りも行われたらしく、この落込みもそれらの痕跡と考えられる。

遺物

いずれも調査区表土からの出土であり、本古墳に伴って出土したものではない。

円筒埴輪（1～10）

1は、口径31.0cm、器厚0.6～0.9cmの薄手である。色調は内・外面とも淡黄褐色で胎土には細かな砂粒を含み焼成は良好である。磨減が著しく、調整は不明であるが、内面には幅3～4cmの粘土紐接合痕が認められる。円筒埴輪と断定できないが、器形は円筒形であるため、この類に含めておく。2～3は口縁部で、内面には比較的目の粗いタテハケ、内面はナデを施す。3は、端部でやや外方に開く。4・5は、タガを有する破片で、タガの断面はいずれも台形を呈すが、4は比較的突出している。6は胴部破片で、内・外面に細かなタテハケを施す。7～10は、いずれも基底部の破片である。7～9は、いずれも磨減が著しく、調整は不明瞭

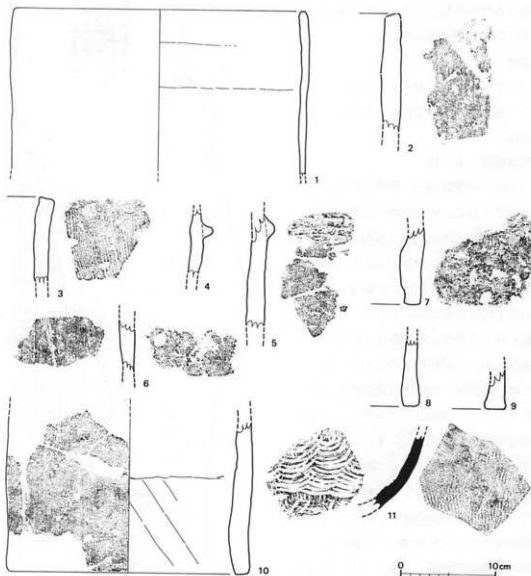


第10図 糸井塚ノ本第2号古墳墳丘断面図（1：100）

であるが、7は、わずかにタテハケが看取できる。10は、外面にタテハケ、内面に斜位のナデを施し、内面の底部から高さ10cmのところに粘土紐の接合痕がみられる。また外面には黒斑を有する。

須恵器・甕 (11)

体部の破片である。調整は外面に平行条線状のタタキのちカキ目・内面には同心円状のタタキ目が認められる。色調は内・外面とも淡灰色で、外面の一部には自然釉がみられる。胎土には細かな砂粒を含み、焼成は良好である。



第11図 糸井塚ノ本第2号古墳出土遺物実測図 (1:4)

VI ま と め

今回の調査成果から、2、3の問題について検討を加えておきたい。

まず、糸井馬場第2号古墳について、県立センターの調査により明らかになった第1号古墳との関係について検討してみたい。

糸井馬場第1号古墳は径約11.0mの規模をもち、幅約3.2～3.4mの周溝を有する円墳で、周溝東側に陸橋部を有する。第2号古墳は全長約15.0m、後円部径約13.2m、造出部幅6.2m、同長さ2.5mの規模で、幅約3.5mの周溝は盾形にめぐり、北東側に陸橋を有する小型の帆立貝形古墳である。両古墳を比較すると、第1号古墳の墳丘径と第2号古墳の後円部径では約2mほど第2号古墳が上回るが、検出面での周溝外縁径や周溝幅、同底面幅ではほぼ近い規模となっている。したがって、第1号古墳の墳丘と第2号古墳後円部との見かけ上の規模では、ほぼ同程度の墳丘をもつといえよう。しかし、第2号古墳は帆立貝形をなし、周溝が盾形にめぐるとは、第1号古墳と同規模の円丘でありながら、より景観上の違いを浮き出させている。両古墳は近接して位置するが、図上復元によると、第1号古墳の周溝南東側と第2号古墳の周溝北西側は、その外側線がほとんど一致する位置となっている。これは両古墳に先後関係はあるにせよ、互いの位置を意識した築造であり、それが可能な時間差の中で成立したことを示している。また同じく図上復元によれば、両古墳の周溝底面の標高差は、第1号古墳南東側と第2号古墳北西側で約0.8mほど第1号古墳側が高い位置となる。このことから考えると、両古墳の境界付近では、旧地形でやや強い傾斜があったことが想定でき、この傾斜を境として斜面上方側に第1号古墳、下方側に第2号古墳が選地、築造されたことになろう。この両古墳が、ある程度の企画、設計を経て築造されたことは、墳端がほぼ正確な円形をなすことから想定できるが、さらに両古墳の規模が近い値を示すこと、共に陸橋部が存在することや盛土の状況が似ることなどを考えれば、両古墳はほぼ同じ築造技術のもとに成立したと考えられよう。

両古墳の先後関係は、調査や出土遺物の比較などからは明確にできなかったが、第2号古墳の時期は、墳形が5世紀代に多い帆立貝形であり、出土遺物では5世紀後半とみられる須恵器(甕)があることから、ほぼこの時期とみてよからう。また第1号古墳では出土遺物からの時期決定が難しいが、前述の通り第2号古墳と相前後する近い時期と考えられよう。

この糸井馬場第2号古墳は、小型の帆立貝形古墳であるが、同形の古墳は県内では本例を含め60例が知られ、その大半は三次地域及びその周辺に集中する。三次地域は、全国

的にみても帆立貝形古墳が集中し、その地域を代表する大型古墳のほとんどが帆立貝形である特異な地域の一つといわれている。その中でも既に調査された、三玉大塚古墳（双三郡吉舎町）、酒屋高塚古墳は、墳丘全長が40mを超える大型の帆立貝形古墳で、その規模や豊富な出土遺物などからみて、当該地域を代表する首長墓の一つであろう。その大型の帆立貝形古墳の中でも頂上に立つ古墳が、糸井塚ノ本第1号古墳（糸井大塚）であり、糸井馬場第2号古墳はその南東約300mに位置している。しかし、糸井馬場第2号古墳は、大型の帆立貝形古墳と違い小規模な円墳と変わらない小型の帆立貝形古墳である。県内の帆立貝形古墳で全長20mあまりの規模の古墳は、10基程度確認されているが、これらを大型の帆立貝形古墳の被葬者と同様に捉えることはできないであろう。であるならば、帆立貝形をとりいれた理由は何かということになろう。この問題を本調査では論じえないが、本古墳については、隣接する糸井馬場第1号古墳の存在や糸井塚ノ本第1号古墳との関わりなど、今後の再検討が必要とされよう。

次に糸井塚ノ本第2号古墳の調査では、墳丘の大半が失われており、周溝が検出されず、伴出遺物も無いことから、規模・時期を明確にすることはできなかった。したがって築造時期については、本古墳の立地や周囲の状況、また過去の踏査記録からの推論となるが、概ね5世紀後半～6世紀前半までと考えられよう。

本古墳の調査区表土中からは、円筒埴輪片が出土したが、過去の踏査記録や古墳が破壊された過程での埴輪の出土は知られておらず、この埴輪片は本古墳に伴ったものでなく、位置的にみて、糸井塚ノ本第1号古墳に帰属する円筒埴輪と考えられよう。今のところ、糸井塚ノ本第1号古墳に伴う円筒埴輪の比較資料はないが、今回出土の円筒埴輪は有黒斑で、県内でもあまり出土例の知られていないものである。前述した三玉大塚古墳、酒屋高塚古墳も埴輪を伴う古墳であるが、有黒斑のものは出土していない。一般に有黒斑の埴輪は、無黒斑のものより古く位置づけられ、帆立貝形古墳としては県内最大の糸井塚ノ本第1号古墳が、三玉大塚・酒屋高塚古墳に先行して築造された可能性を示すものであろう。

参考文献

1. 広島県^{双三郡}史料総覧刊行会『広島県^{双三郡}史料総覧』第5冊 昭和49（1974）年
2. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 昭和53（1978）年
3. 石部正志・田中英夫・宮川徳・堀田啓一「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』106 昭和55（1980）年
4. 榎本誠一「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌』第69巻第3号 昭和59（1984）年
5. 桑原隆博「三次地域における古墳の様相―糸井大塚古墳について―（その1）」『芸叢』第16集 昭和61（1986）年



a. 糸井馬場第2号古墳遠景（西から）



b. 同 上 近 景（東から）



a. 糸井馬場第2号古墳全景（北から）



b. 同 上（西から）

a. 糸井馬場第2号
古墳陸橋部
(東から)



b. 同上周溝上層断面
(西から)



c. 同上遺物出土状況
(北から)



a. 糸井馬場第1号
第2号古墳全景
(南西から)



b. 糸井馬場第2号
古墳造出部
(南から)



c. 同上くびれ部
(北から)





a. 糸井馬場第2号古墳調査風景（北から）



b. 同 上 出土遺物



a. 糸井塚ノ本第2号古墳近景（東から）



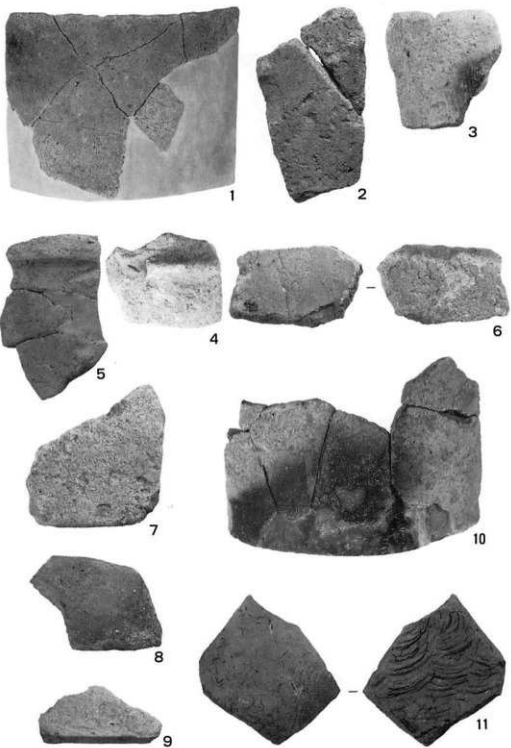
b. 同 上 調査風景（東から）



a. 糸井塚ノ本第2号古墳調査前全景（西から）



b. 同 上 調査後全景（西から）



糸井塚ノ本第2号古墳調査区出土遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第57集

糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳

発行日 昭和63(1988)年3月
編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733広島市西区観音新町4丁目3-49
電話(082)295-5751

印刷 株式会社若うせい
中国支社 〒730広島市中区八丁堀2-6
電話(082)221-6711